新 世界の情報 information world

弘前大学大学院医学研究科
脳神経内科学講座教授　東海林幹夫

アルツハイマー型認知症治療薬開発の現状（ベルギー）

2018年５月17日、ヤンセンファーマ社が開発中のBACE阻害薬であるAtabecestat（アタベセスタット）の臨床治験の中止が世界中に発表された。BACE阻害薬とはアミロイドベータ（Aβ）前駆体蛋白からAβのアミノ末端を切り出す酵素BACEの阻害薬で、この酵素の作用を阻害すると脳で作られるAβを少なくすることができる。従って、脳のアミロイド蓄積を抑制し、認知機能低下の発症を阻止できる薬剤として期待されていた。これまでに、世界で約600人がこの臨床治験に参加していたが、現在、新たな被験者の新規登録は中止し、発症以前の晩発性アルツハイマー病を対象とした第２ｂ/３相EARLY試験（有効性、安全などを検証するための第２、第３相の試験）と第２相長期安全性試験で投薬を中止している。この原因は重篤な肝障害が数名に出現したためで、ヤンセンファーマ社によれば薬剤の効果とリスクを比較すると、これ以上臨床治験を続ける利点はないものとされた。今後は薬剤投与を受けた参加者の長期安全性モニターを続けているとしている。

Atabecestatは、『ぽ～れぽ～れ』2017年10月号の新・世界の情報に掲載したDIAN-TU（常染色体優性遺伝性アルツハイマー病患者を対象とした発症予防介入）で使われる薬剤であり、本予防治験の今後の動向が注目されている。５月26日時点では、DIAN-TU Next Generation（DIAN-TU次世代試験）では深刻な肝障害はみられていない。孤発例のアルツハイマー病とは異なる経過と予後を示す常染色体優性遺伝性アルツハイマー病では、発症予防を目指した介入試験として薬剤の効果はリスクを上回るため継続とされているが、肝障害の早期発見のための予防的な検査を頻回に行うようにプロトコール（治験の規約）の改訂を行っており、新規登録は暫く停止されている。

同じBACE阻害薬の開発では、メルク社のverubecestat（ベルベセスタット）とリリー・アストラゼネカ社のlanabecestat（ラナベセスタット）は効果が無く中止となり、リリー社のLY2886721は肝障害のため開発中止となっている。アルツハイマー型認知症の薬剤開発では、巨額な経費を投入した臨床治験が膨大に繰り返されているが、この20年間に成功したのは現在私たちが使用しているアリセプトなど、たったの４剤のみである。現在検討されている多くの薬剤の中から１日も早く、効果が確認できる薬剤の出現が待たれており、また、これが私たちの責任と考えている。

2018 ● JULY

CONTENTS

●新・世界の情報　東海林幹夫 ……2
●早川一光顧問を偲んで ……3
●2018年度総会
新体制の一年を振り返り、次の一年の取り組みを確認 ……4
●総会アピール ……5
●支部交流会（分科会・全体会）
早川・三宅両顧問を偲ぶ会 ……6-7
●実りある人生を「家族の会」とともに
「本人も家族も仲間も一緒に楽しむ」がモットー　勝田登志子 ……8-9
●日本認知症ケア学会・読売認知症ケア賞
「功労賞」を髙見国生顧問が受賞 ……8
●2018年度京都ヒューマン賞に
鷲巣典代理事が選ばれました ……9
●いきいき「家族の会」―まちでもむらでも
徳島県／三重県 ……10
●“つどい”は知恵の宝庫 135　山口県支部、本部電話相談員編
自分の時間を持ったことに罪悪感を感じています ……11
●会員さんからのお便り ……12-13
●地球家族パートⅡ ……14
●調査についてのお願いとお知らせ ……14
●事務局ほっとコーナー／業務日誌 ……14
●鈴木森夫代表の忙中〝感〟あり 13 ……15
●編集委員の窓 ……15
●各地のつどい ……20

早川一光顧問を偲んで

代表理事　鈴木森夫

2017年５月、常任理事会にて（撮影・鈴木森夫代表）

「家族の会」の生みの親、育ての親のお一人であり、常に私たちとともに歩み、「家族の会」の羅針盤として、導いてくださった早川一光先生。あの「早川節」がもう聞くことができないと思うと、寂しくてたまりません。最期まで、「家族の会」の行く末を案じ、エールを送り続けてくださいました。今年も総会に出て、全国のみなさんに会って言葉を送りたいと、亡くなられる直前まで言っておられましたが、叶いませんでした。

早川先生は、京都・西陣に住民出資の白峰診療所を開設し、半世紀以上にわたり地域医療の先達として、常に患者や家族に寄り添い、路地裏で在宅医療に尽くしたことから「わらじ医者」と住民から慕われました。京都新聞の「高齢者なんでも相談」で三宅貴夫先生とともに「老人ぼけ相談」を担当。訪れた家族と集いを開き、それが1980年１月の「家族の会」結成につながりました。会結成後は、全国各地を講演して回り、「ぼけたってええやないか」と老いとの向き合い方を説き、介護家族へねぎらいと励ましを贈り、「家族の会」支部結成への熱い思いを日本中に伝える役割を果たしてこられました。

晩年、ご自身が病気になってからも、それまでと変わらず総会や理事会に顔を出され、「みんなの顔を見ると頑張れる」「みんなが来てよかったと思える会にしてほしい」、そして、「皆さんが身につけたものをしっかりと次の世代につなぎ、そのまた次の世代を育ててほしい」と「家族の会」の運動の継承と発展を強く願っておられました。

私たちは、早川先生を失った今、悲しみを乗り越えて、先生の遺志を受け継ぎ、「誰もが歳をとっても安心して暮らせる社会」をめざして、「家族の会」の歩みを続けていかなければなりません。早川先生、長い間ほんとうにありがとうございました。これからも私たちを見守っていてください。心からご冥福をお祈り申し上げます。

早川一光顧問の略歴

■2018年６月２日逝去（享年94歳）

■略歴

1924年、満州奉天生まれ。愛知県知多郡横須賀町（現・東海市）育ち。京都府立医科大学卒業。1950年、西陣に住民出資の白峰診療所を開設。堀川病院となってのち、院長・理事長を歴任。「自分の身体は自分でまもる」をスローガンに、住民主体の地域医療に専念。1997年から2003年まで京都府美山町の美山診療所所長。1998年、京都衣笠に「幸・総合人間研究所」設立、2002年同所に「わらじ医者よろず診療所」を開設。1987年から2018年３月まで、KBS京都ラジオで「早川一光のばんざい人間」のパーソナリティーを30年にわたり務めた。

■著書

『わらじ医者京日記 ボケを看つめて』（ミネルヴァ書房　1979年、第34回毎日出版文化賞を受賞。1982年に、この本を題材にNHKドラマ人間模様『とおりゃんせ』放映）、『いきいき生きる 人間学のすすめ』（京都21プロジェクト、早川さくら製作・編集　京都新聞社　1996年）、『わらじ医者よろず診療所日誌』（かもがわ出版　2008年）、『わらじ医者の来た道　民主的医療現代史』（青土社　2015年）など多数。

介護初心者の悩みに応える

“つどい”は知恵の宝庫 135

担当／山口県支部
協力／本部電話相談員

自分の時間を持ったことに罪悪感を感じています

80歳の実母（要介護２）は、レビー小体型認知症と診断されて７年になります。介護のために母と同居する直前までは、日韓の学生交流支援事業を主宰している主人を手伝って活動していました。最近の母は歩く時に支えが必要になってきていて、夜間トイレに行こうとして転倒し、大腿骨を骨折したため入院となりました。母が入院して時間ができましたので、７年ぶりに訪韓し、知人との交流を楽しみました。しかし、母を置いて自分が自由にしている罪悪感に悩みながらの滞在でした。今後、自分の時間をどのように考えたらいいか悩んでいます。（相談者　50歳代娘・元教員）

お母さまの気持ちを聞きましょう▶

退院後の暮らしをお母さまがどう考えているのか聞いてみましょう。今後も、あなたに介護してほしいと強く望まれているかもしれません。でも、もしかしたら、あなたの負担の大きさに心を痛めているかもしれません。そのお気持ちを聞くことであなたの進む道も見えてくるのではないでしょうか。

夫の一言で前向きになれました▶

私も実母を介護中に友人と出かけたり、自分だけが楽しむことに罪悪感を感じていました。その一方で、自分のやりたいことは我慢することが当たり前の暮らしが何年も続いて、精神的に辛くなってきていました。そんな時、「君が元気でいることをお母さんも望んでいるはず」との夫の一言で、すべきことをしているのだから、自分が好きなことを我慢しなくてもいいと思えるようになりました。

活動を再開することも考えては？▶

ご主人と一緒にされていた活動を７年間休み、お母さまに尽くしてこられました。これからは介護が中心の生活から、ご主人との時間を大事にする生活に切り替えても良いのではないでしょうか。ご主人は、活動を再開してほしいと思っても言い出せなかったのではないかと思いますよ。活動再開を前提にできる介護を考えてみることをお勧めします。

気持ちは変わるものです▶

デイサービスやショートステイに送り出した後にも罪悪感を感じたという家族の話をよく聞きますが、「始めだけでした」と言われる方も案外多いですよ。つどいに続けて参加し、皆さんの話を聞くうちに気持ちは変わるかもしれません。要は気の持ちようではないでしょうか。

施設入居も考えてみては？▶

お母さまは、徐々に介護が必要な場面が増えていたのではありませんか。高齢なので骨折が治ったからといって、以前と同じように歩けないかもしれません。施設入所も視野に入れて考えてみましょう。お母さまを自宅で介護したいあなたの気持ちはわかりますが、施設に入居したからといって、介護は終わるわけではありません。今までと違う形でお母さまと一緒の時間を作っていきましょう。

会員さんからのお便り

このコーナーに寄せられたお便りの他、入会申込書、「会員の声」はがき、支部会報から選び掲載しています。

お便りお待ちしています！

〒602-8143 京都市上京区猪熊通丸太町下ル
仲之町519番地 京都社会福祉会館内
〈「家族の会」編集委員会宛〉
FAX.075-811-8188
Eメール office@alzheimer.or.jp

ぽ～れぽ～れ５月号
「忙中“感”あり」を読んで

介護してきたことは私の財産

●北海道　Aさん　70歳代　女性

鈴木代表の「忙中“感”あり」は直接語りかけて下さるような内容で、毎号励まされています。31年前の「10ヵ条」、今も生きていますね。私も嫁の立場で姑を12年、在宅介護しました。オムツ交換８年、食事介助７年…それは自分の財産です。今、悩む人に「大丈夫、大丈夫…」と声かけ、手をつなぎ、心をつないで、会の活動を続けていきたいと思います。

ぽ～れぽ～れ４月号
「高齢認知症患者のためのホスピスを」を読んで

我が身が気になるこのごろ…

●鳥取県　Bさん　70歳代　女性

義母（93歳）、夫（64歳）の病死、実父（99歳）の看取りを終えました。現在は96歳の実母を妹と看ています。毎月、家族会へ参加していますが、様々の介護のありようにひとことで言えないような昨今です。最近は親のことより、我が身が気になるこのごろです。

ぽ～れぽ～れ４月号の「高齢認知症患者のためのホスピスを」に共感しました。

崖っぷちです

●神奈川県　Cさん　50歳代　女性

先月から父がパーキンソン病で緊急入院し、80歳代の母がひとりになり、独身の弟が夜だけ泊まりに行っています。私はパート先が母の住まいに近いので、たまに泊まったり、病院に付き添ったりしています。

先月、ショートステイを１週間利用してみましたが、問題行動を起こし、強制退所になりました。弟が海外に長期出張を命じられましたが、今回は介護を理由に断りましたが、次回また命じられたら、母を施設に入れることを考えてくれと言われました。母は帰宅願望がとても強く、父は正直、一生老健でおわるかもしれず…。どうしたものかと、本当に崖っぷちです。なにか良い知恵をかしていただけないでしょうか？

一人暮らしの限界

●滋賀県　Dさん　60歳代　男性

両親と子ども（私）一人の家族です。大学進学で家を出て京都に就職し、定年退職後も京都市内で再就職して現在に至っています。昨年11月に父親が亡くなりましたが、父が建てた家を空けられないと言って、愛知県の実家で90歳を過ぎた母がひとりで暮らしています。２年前にアルツハイマー型認知症と診断され、認知機能はかなり落ちてきたものの、ゴミだし、炊事、買い物は何とかできています。月に３回程度、実家へ帰っていますが、そろそろひとり暮らしも限界かなと感じています。

“周徊”への対応で困っています

●静岡県　Eさん　50歳代　女性

前頭側頭型認知症の夫（50歳代）は道に迷わず帰ってきますが、たまに呑み屋に入って飲んできます。お金は持たせていないので私が後から支払い、今度から入れないでと頼んでいます。いつか警察に捕まるようなことがあったら困ると電話相談をしたら、警察や包括に前もって伝えておくようにと言われ、交番と警察に相談に行ったところ、ここの仕事じゃない、包括に行けと言われ、包括では、自分で気をつけるしかないと言われました。行方不明になってから探すことしかしていないそうです。

高額な探知機を導入するか、本人を閉じ込めるしかないのでしょうか？元気なので一緒に散歩はしますが、３万歩あるいて帰ってきても、ちょっと休んだらすぐ出たがるので、全部付き合うのは無理です。警察はお金を持たせればいいと言いますが、たくさん飲みすぎて大変なことになったり、大けがをしたり、騙されてお金を盗られたこともあります。

認知症で行方不明何万人とニュースになっているのに、警察が全く認知症に関心がないのにも驚きました。地域によるのだと思いますが…。

物を探す一日

●長野県　Fさん　60歳代　女性

私の母は呆けないようにと、手先を使い頭を刺激する。車で移動中は対向車のナンバーを読み上げるなど、努力をしましたが、68歳でアルツハイマー型認知症と病名をつけられました。16年間、辛い思いをし、亡くなりました。

今年、私は68歳となり、物を探すことから一日が始まり、物を置き忘れて一日が終わっています。今、母の子であることを実感しているところです。これからの自分のために「家族の会」に入りました。

皆さまと一緒に…

●秋田県　Gさん　40歳代　男性

認知症地域支援推進員として働いています。その中で「家族の会」の存在を知り、つどいに参加させていただきました。皆さまの苦労や悩み、不安をお聞きし、地域作りのために必要なことを日々考えています。皆さまと一緒にできることに取り組んでいきたいと思っています。

やっと出会えた

●群馬県　Hさん　70歳代　女性

やっと出会えました「家族の会」。２年前にアルツハイマー型認知症と診断された70歳代の夫を介護してきて、今までいろいろあったことを、同じ仲間の会でたくさんの悩みを出し合い、分かち合い、情報をもらい、励まされ、立ち直ってきました。

入会のご案内の９大法則、１原則は特にありがたいです。

元気をもらっています

●三重県　Iさん　70歳代　女性

３歳年上の夫は、４年前にレビー小体型認知症と診断されました。「家族の会」に参加し、いろいろな話、悩みを聞き、大変参考になるとともに、心が少し軽くなり、元気をもらいます。

施設はたくさんありますが、どの施設もなかなか入居できず、施設の良い悪いも入居して初めてわかることがあります。

※お名前はイニシャルではありません。
年齢は「50歳代」等で表記しています。